

平等をつくるもの

大田区立貝塚中学校 二年 藤澤 莉子



私は幼い頃から、税に関する話を親に聞くことが多くあった。そこでよく聞く言葉は、「所得税」というものだった。まだ税の仕組みを理解できない年頃ではなかったが、何となく、働いて稼いだお金を納めるのかと両親に問い詰めていたそうだった。また、人により税率が違うことを知って疑問に思ったりもしていた。小さい子に説明するには、それが義務だからと言う他ない。でも、私はどうしてもそれが不平等に感じてしまったのだ。

今でも時々、平等とは何なのか考えることがある。平等の定義は、差別がなくみな一様に等しいことだ。しかし、平等には大きく分けて二つの種類がある。私は社会の授業でこの二つの平等について学んだことで、税金に対しての考え方が変わった。平等の種類とは「絶対的平等」「相対的平等」だ。「絶対的平等」とは各個人の持つ違いは考慮せず、一様に扱うという考え方を指す。その一方で、「相対的平等」とは様々な違いを考慮した上平等に扱うという考え方を指す。これを踏まえた上で、私は所得税について調べた。所得税とは、収入から経費を差し引いた所得から決まる税だ。これは家族構成などの本人を取り巻く状況に応じて変動する。そしてこの「所得」が多くなるにつれて、納める金額の割合が段階的に高くなる。これらを知ったとき、私はまず平等だなと感じた。幼い頃に抱いた感情

とは真逆である。収入だけではなく、個人の状況や必要な経費に細かく配慮された税。物を知らないというのは怖い。たったそれだけで物事の見方が真逆になってしまう。所得税は、相対的平等のもとに成り立っている。

しかし、社会で重視されがちなのは絶対的平等だ。政府を、そして日本を支える税金のうち、ほとんどは消費税で賄われている。消費税はある意味、絶対的平等のもとに成り立つ税だ。子供から大人まで、収入のあるなしに関わらずモノにかかる税。これは確かに大切だといえる。しかし、私はそれ以上に、所得税も重要であると感じた。なぜなら所得税は平等をつくるものであるからだ。日本を引っ張る人々は、見える仕事の裏で見えない力で社会に貢献している。これは何よりも価値のある大事なことだと気づいた。こうして私の所得税に対する思いは良いものへと姿を変えていったのだ。それは少しずつ、確実に。

税金がない社会で、私は生きていけない。改めて周りを見渡せば全ては税金によって支えられている。道路も水道も警察も、日々使っている教科書だってそう。税金があるから私たちは平等に暮らすことができている。目には見えにくいけれど、税への感謝は忘れてはいけない。この世界の平等を支えるのは税金なのだ。所得税について調べる中で生まれた感謝の気持ちを糧に、いつか大人になったとき、平等をつくる納税者に私はなりたい。